

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 山本 嘉孝

本論文「十八世紀日本の漢詩文と経世 — 正徳～寛政期の幕府儒臣を中心に」は、近世中期すなわち十八世紀を中心とする時期の日本において大きな展開を見せた漢詩文について、「経世」という観点を軸に、おもに幕府に儒臣として仕えた学者たちの著述をたんねんに追いながら、その特質を浮かび上がらせ、新たな位置づけを行なったものである。これは、この時期の漢詩文については荻生徂徠（1666～1728）及びその門下の著述や詩文を軸として論じられがちであったという研究史的反省のもと、より俯瞰的かつ核心的な議論のための基盤を構築しようとする意欲的な試みと言える。

全体は、三部構成による本論全十一章と前後に加えられた序論と結語からなる。

序論「近世日本における漢詩文と経世済民の関係」においては、経世にかかわる儒者としての「儒臣」を取り上げることの歴史的射程が、中国の士大夫との比較を交えながら述べられ、先行研究をふまえた本論文の位置づけがなされる。

第一部「擬古詩と経世」は、「擬古」の技法によって作られた詩と作者自身の経世とのかかわりについて、第一章「室鳩巢の和陶詩 — 六朝詩の模倣と宋詩の撰取」、第二章「室鳩巢の擬古詩 — 模倣・虚構・寓意」、第三章「室鳩巢の辺塞詩 — 「古題」詩の制作と忠臣像の形成」、第四章「新井白石・室鳩巢の中秋詩 — 李白の模倣と主君の死」の四章をもって論じる。章題に示されるように、木下順庵門下（木門）の室鳩巢（1658～1734）および新井白石（1657～1725）の漢詩が主題となり、詩に即した緻密な検討によって、木門の儒者における詩作技法としての擬古が、経世に参加する忠臣としての自己を提示し、また現今の君主による治世を讃えるという機能をもつものであることを明らかにする。

第二部「幕臣教育における漢詩文・和歌の位置」は、第五章「中村蘭林の詩文論 — 近世中期奥儒者の朱子学修養と文芸」、第六章「中村蘭林と和歌 — 学問吟味の素案における平安朝の讃仰」、第七章「柴野栗山と寛政六年学問吟味 — 朱子学と漢文作文の奨励」の三章から構成され、室鳩巢の門人である中村蘭林（1697～1761）及び蘭林の教えをうけた柴野栗山（1736～1807）における学問と漢詩文、また和歌のありかたについて、寛政四年（1792）に初回が行われた幕臣対象の学力試験である「学問吟味」を視野に入れて論じる。経世から切り離された技芸的な擬古詩が徂徠門下によって広まった時代にあって、彼らが学問や経世の場から作詩を遠ざけ、和歌の吟詠や唐宋古文を規範とする読書と作文を心がけたこと、木門における擬古の技法はむしろ

そちらにこそ継承されていることの意義を、朱熹（1130～1200）の読書法（学問修養論）の受容を補助線としながら示す。この時期における古書・古文辞の学習は、いわゆる古文辞学派のものではなく学統や学派を越えた普遍性を有し、その基盤の上にそれぞれの方法があったとの指摘は重要であろう。

第三部「諸芸の流行と経世家」は、第二部とは表裏をなす領域、すなわち経世から切り離されたものとして流行した技芸がどのように論じられたかに着目し、それが漢詩文制作の方法論と密接にかかわることを明らかにする。まず第八章「祇園南海の竹枝詞 — 明末古文辞説の受容と「民間」の称揚」では、木門の祇園南海（1676～1751）による竹枝詞「江南歌」を取り上げ、明代文人の言説を受けた「民間」における「真詩」の発見という文脈から擬古という技法が行われたことを示す。第九章「榎田北岸の插花論 — 袁宏道受容における插花と禅」では、北陸の大聖寺藩医であった榎田北岸（1757～1794）の插花論に着目し、彼が習い事として流行していた擬古的作詩を学びながら袁宏道（1568～1610）の詩を契機として批判に転じたことと插花論における袁宏道の受容との関連を示す。第十章「山本北山の技芸論 — 経世家による古文辞説批判」は、北岸と同様に袁宏道に傾倒した山本北山（1752～1812）が漢詩文・茶・花・囲碁・医学などを包括して捉えた技芸論を検討し、表層的技巧の超越による脱俗を指向する北岸とは異なり、むしろ風俗改良を目指した技芸の向上を説くことを明らかにする。この二つの方向は、十八世紀後半以降の漢詩文制作論の両輪をなすものであるとも言え、この両者を総合した例として、幕末の儒学者林鶴梁（1806～1878）の作文論が第十一章「林鶴梁の文論と幕末の作文 — 唐宋古文と「気」による感化」にて取り上げられる。

以上の三部を経て、結語「日本近世漢文学史再考 — 擬古・古文辞・反古文辞の系譜」においては、近世期においては、擬古は徂徠一門の専有物ではなく広く共有された方法であり、そこから生まれる多様性こそが重要であるとの見解が示され、さらに、経世を軸として見ると、従来強調されてきた近世文学の「雅俗」という枠組みの他に、「朝野」という尺度も有効であろうとの見通しも示される。今後の考究を待つものではあるが、示唆するところは小さくない。

以上のような構成と内容をそなえた本論文は、近世日本漢文学研究に新たな俯瞰的視座を提供し、従来に比してバランスのとれた文学史的理解をもたらすだけでなく、文学や技芸における技術と精神という普遍的な問題についても、近世日本における擬古という具体的な視点から切りこんでその相互連環のダイナミズムを明らかにしており、功績は高く評価されるべきである。審査委員会では、経世の捉え方がやや一面的で、経世にかかわる主張と実際の行為とのレベルの相違などに留意する必要があること、擬古における寓意を論じるには、作者の意識のみならず、読者との関係まで視野に入れるべきであることなどの指摘があったが、これらは本論文の学術的価値を損なうものではないことも確認された。

よって、本審査委員会は博士（学術）を授与するにふさわしいものと認定する。